(7)　在日外国人の分娩を介助した助産師の困難感とその対処

川崎医療福祉大学大学院保健看護学専攻　○中西　美菜

【要　旨】

在日外国人は2013年には230万人に達し，15～49歳が69.8% を占めている．在日外国人の出生率は全出生数の1.2% に当たる．

今後，増加が予測される在日外国人の日本での出産に際して，助産師はどのような困難感を体験し，どのように対処しているのかを明らかにすることを目的とする．

対象者は助産師の経験年数1年以上で，在日外国人の日本での初回分娩を1例以上介助した助産師とした．データ収集はインタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した．分析方法は，得られたデータを助産師の困難感及び対処を抽出しカテゴリー化した．

在日外国人の分娩を介助した助産師の困難感は，4つのカテゴリー（医療英語，意思疎通，理解力，文化の違い)が生成された．対処は1つのカテゴリーが生成された．

【医療英語】は，分娩に関する英語と，通訳者確保で構成された．【意思疎通】は，言葉が不十分と，コミュニケーションがとれないで構成された．【理解力】は，指示や説明が理解されないこと及び，理解できたかどうかの判断で構成された．【文化の違い】は，痛みの理解，内診に対する理解と出産の風習で構成された．

【対処】は，視覚的媒体の活用，産婦の周囲のサポート，通訳者の確保で構成された．

在日外国人の分娩介助において，助産師が困難と感じているのは，分娩介助に必要な医療英語，産婦との意思疎通であると考えられる．

助産師の指示や説明が理解されたかどうか判断できないことや，日本人と外国人の痛みや内診に対する理解の違いや，胎盤や産着に対する文化の違いに困難を感じていることが推測される．

対処としては，視覚的媒体の活用，産婦の家族や周囲の人のサポートの活用などが示唆された．

助産師は在日外国人の分娩介助に様々な困難感を抱えながらも，困難に対処していることが明らかになった．